

## Archaeologies, Issue 1.2

### Japanese abstracts

---

#### 1. 過去の教育学

アン・パイバーン インディアナ大学 アメリカ合衆国

要旨：もし考古学がこれほど容易に政治的暴力に手を貸してしまえるのなら、考古学を政治的紛争の平和的解決を促進させるのに考古学を使うことで、この状況に先手を打つ方法があるはずだ。考古学における革命の鍵は、受け入れられた知識とともに保持している捕らえにくいメッセージを認識し、新しい反植民地主義的枠組みで教えることを学ぶことにある。

#### 2. マヤの美術史を教える

マーヴィン・コホダス ブリティッシュコロンビア大学 カナダ

要旨：30年にわたって教育に携わった経験から、著者はマヤの美術史を教える際の重要な問題を認識した。自分の努力がもつ政治的悪影響を認識し、マヤの人々にも教育と過去の構築に参加してもらうことで、著者はマヤの人々に対する責任を果たそうとしはじめていく。これによって、教育の質と、実践の倫理はともに高められた。

#### 3. 事実、それとも推測？ 学生が考古学的知識と、なぜそれが分かるのかを理解するのにフェミニズムの視点はいかに役立つか

ジュリア A・ヘンドン ゲティスバーグ大学 アメリカ合衆国

要旨：大衆の教育とコミュニケーションについて真剣に考えるならば、考古学の教育学について考えなければならない。学部生に考古学を教える場合には、方法・理論・倫理の問題が、考古学的実践において統合された中心的な側面として示すともっとも効果的である。いくつかの異なるアメリカの教育機関における著者の教育経験の事例に基づいて、フェミニズムに触発された研究が、研究計画の現実、多様な証拠を利用すること、解釈を立証することを学生に教えるのに、いかに教育的に有効であるかを論じる。

#### 4. 革命はテレビで放映される：アフリカ考古学教育とパブリック考古学の課題 南アフリカの事例

アリナ・ケロ・セゴバイ ケンブリッジ大学 イギリス

要旨：アフリカでは、考古学はいまや文化遺産開発の重要な起点と認識されている。しかしながら、考古学教育はひどい資金不足の状態である。本論は、ボツワナと南アフリカの事例に基づいて、アフリカにおけるパブリック考古学発展のための課題と好機を明らかにする。

#### 5. 革命的考古学の教育：歴史形成と遺産管理におけるアフリカの試み

ピーター R・シュミット フロリダ大学 アメリカ合衆国

要旨：本論は、タンザニアとエリトリアの遺産管理の研究・実現を試みているアフリカ人の学生の経験に焦点をあてる。著者は、独立した意志決定を重視する実践的なアプローチの必要性和、急速な発展と政治動乱というコンテキストのなかで専門家としての自信を深めることを例証する。このような教育的観点は、彼ら自身の観点から彼ら自身の遺産の考古学を実践する好機を見出している学生の積極的な返答を引き出している。

#### 6. 祭りごっこ：考古学と教育との関係についての省察 - リオデジャネイロにおける児童のパースペクティブを通して

マルシア・ベゼラ ゴイアス・カソリック大学 ブラジル

要旨：本論では、ブラジルの小学生へのインタビューを通して、彼らが考古学をどのようなものと考えているか、そして、彼らの過去に関する知識が、どのように彼らの現在の理解に影響するか、そして、現在の経験がどのように彼らの過去の視点を形成するのかを理解する。

#### 7. Mesolore: 批判的思考をするための教育

ライザ・ベイクウェル、バイロン・エルスワース・ハマン ブラウン大学

要旨：著者は Mesolore の考案者である。Mesolore とは、学生へのメソアメリカの文化、過去、および現在に関する計画された相互的かつ学際的な教育プログラムのことをいう。また、考古学との多義的かつ学際的な構造と目的について説明する。

#### 8. 意図的な教育：ジェンダー考古学

ベッティナ・アーノルド ウィスコンシン・ミルウォーキー大学 アメリカ合衆国

要旨：本論では、政治的表現に関する教育の関係、特に考古学が進展する中でのフェミニストによる批評の役割、およびその批評の場について議論する。

#### 9. 世界は、そして考古学はだれのもの？植民地主義の現在と政治の復活

ヤニス・ハミラキス サザンプトン大学 イギリス

要旨：筆者は、イラクとアフガニスタンでますます積極的に進む植民地主義的事業を定義づける。そして西洋の考古学コミュニティが、この二つの国の状態にうまく対応しようとして犯した大失敗について考察する。考古学を強調する方法は、不法で非倫理的な戦争の正当性だけでなく、その戦争が成り立たせようとした政治体制や真実の再生産にも効果的にはたらいってしまう。筆者は、西洋の大都市的中心に見られるような世界の中心を「脱中心化」させ、「周縁」が主導権を握り、優先権を得て、揺れ動く考古学的認識論を擁護できるよう、WAC に求めている。

#### 10. 東欧の発見：ブルガリアや東欧諸国とWACとの協力の未来像

ツォニ・ツォネフ 考古学・博物館機構 ブルガリア

要旨：この記事によって私が明らかにするのは、南アフリカでのアパルトヘイト政策へのモラルや政治的対応としての WAC の形成と、ベルリンの壁が崩壊した後のヨーロッパの変化との関係である。自らの正当性によってたつ学問としての考古学は、もはや間違った客観主義に影に隠れることはできない。多くのヨーロッパ諸国の抱えるやっかいなナショナリズムの過去を再評価する必要性のために、考古学とナチズム、共産主義との関連の再評価を免れない。さらに、ブルガリアでのポスト共産主義の現実と、文化遺産マネジメントの営利化に対する考古学者の対応についても再検討するべきだと私は考える。WAC とブルガリア、あるいは他の東欧諸国との協力の重要な部分を述べよう。一番大切なのは、WAC とバルカン半島出身の考古学者とが協力してこの学問に人間味を与える努力をすることである。1990年代には、「視覚にうったえる」考古学がバルカン半島での戦争を促したナショナリズムの維持に、多大に寄与したということが明らかになった。

#### 11. 単一世界の考古学 (One World Archaeology) におけるポスト植民地主義的批判：北アフリカの居場所はどこ？

エレナ A.A. ガルシア カッシーノ大学 イタリア

要旨：北アフリカは南ヨーロッパの延長だとずっと考えられてきた。北アフリカの考古学者がヨーロッパとは異なる動きを追って初めて、現在の議論や最新の批評から除外されていることが明らかになった。ここで提示するのは、北アフリカの二つのアラブ国家、すなわちリビアとスーダンでの多年にわたるフィールドワークによって得られたポスト植民地的批判である。まず、現在生じている意見を導く、考古学者の主観的/客観的役割を解体

することから始める。次に、経済的發展や資源開発についての考古学者の観点について検討する。最後に北アフリカを、社会的・政治的動向に関連させるのと同じく、現在の考古学的議論に再配置させることを提案する。